2022年度

日本近代文学会6月例会

6.26
日 Sunday 2022
14:00〜

《特集》純文学ならざる〈小説〉たち ——中間・大衆・娯楽

《研究発表》

「文壇」の発掘と創成◉山岸郁子

三島由紀夫のエンターテインメント作品と方法意識 ——三島由紀夫「音楽」を視座として ◉山中剛史

忍法小説から歴史小説へ ——司馬遼太郎一九五〇- 六〇年代の創作をめぐって◉関立丹

特集趣旨

本特集は、特に一九五〇〜六〇年代に多くの読者を獲得した、「純文学」ならざる作品群に焦点を当てることで、従来の文学受容のあり方の再考を企図するものである。

純文学ならざる作品群とは、具体的には以下の二つの作品群を想定している。一つは、純文学作家が多数書き残している、純文学ではない傾向を持つ作品群である。一九五〇年代、純文学の創作と並行して、メディアの要請に応じた純文学ではない傾向の作品を、週刊誌や女性誌に発表する作家が登場する。このような書き分けは、拡大する文学市場への対応として、三島由紀夫や川端康成など、多くの作家が行ったことでもあった。そこには、作家の純文学に対する意識という内面の問題と同時に、週刊誌や婦人雑誌への連載などのメディアの要請や読者の期待、映画化などの様々な外的要因があったことは疑い得ない。

もう一つは、もともとは純文学を志向していた作家たちによって書かれた、剣豪小説や娯楽的な要素の強い小説群である。ここには、歴史的人物や社会的事件を題材とした大衆寄りの歴史小説も含まれる。例えば、松本清張の作品群が色濃く投影された時代性ゆえに話題を呼び、広範な読者を獲得しただけでなく、数々の映像化を繰り返していったことは周知のとおりである。

文学における芸術性と通俗・大衆性とをめぐる規範は、通俗小説が盛んに書かれた大正期から、さまざまに変容してきた。一九三五年の芥川賞・直木賞の創設は「純文学」・「大衆文学」を区画するためのものではなく、その境界で活躍する作家を生み、一九五〇年代には「純文学と大衆文学の中間に位置する小説」としての「中間小説」が隆盛する。こうした境界上の葛藤によって、のちに司馬遼太郎作品などが受容される素地が形成されたといっても過言ではないだろう。

本特集が従来の研究や文学史では問題にされてこなかったこれらの純文学ならざる傾向を持つ作品群に注目するのは、文学における芸術性と通俗・大衆性とをめぐる規範の問題を改めて考える上でのより大きな批評的視座を獲得するためである。純文学ならざる作品群は、読者の歴史観や社会問題に対する認識に大きな影響を及ぼした一方で、それが同時に偏見や差別意識を読者にもたらすことにもなっただろう。こうした歴史的な観点から一九五〇〜六〇年代の小説のあり方を考えることで、純文学ならざる作品群の持つ力を功罪併せて考えてみたい。